

博士論文の内容の要旨

論文題目 Historical Change in the Formal Licensing Conditions of Personal Pronominal Objects in English: A View from Intra-syntactically Driven Language Change
(英語における人称代名詞目的語の形式的認可条件の歴史的变化 – 統語部門内で駆動される言語変化からの見解)

氏名 宮下 治政

本論文は目的語として機能する英語の人称代名詞（以下 PPrn）の生起位置の歴史的变化を、電子コーパスを用いて実証的に調査し、生成文法理論における普遍文法への原理と媒介変数によるアプローチ（以下 P&P アプローチ）に基づき理論的に考察したものである。

現代英語（PDE）では、PPrn 目的語の節内での生起位置は基本語順では（否定辞に後続する）本動詞（V）の直後に固定されている（e. g. **I do not know him.**）。これに対して、V 移動が存在している初期の時代の英語（古英語（OE）・初期中英語（EME）・後期中英語（LME）・初期近代英語（EModE）・後期近代英語（LModE））では、その生起位置は PDE とは異なり、比較的広範囲に亘ることが知られている。例えば OE では、PPrn 目的語は、完全な名詞句が出現できない位置である、話題要素が節頭にある動詞第 2 語順（V2）主節の V の直前の位置、wh 句や否定辞等の演算子要素が節頭にある V2 主節の V の直後の位置、従属節の補文標識の直後の位置、中域左端の主語の直後で助動詞の直前の位置（ワケナゲル位置）に生起可能である。また EModE では、PPrn 目的語の生起位置は V の直後に固定されつつあるが否定辞に先行し得ることが知られている（e. g. **I know him not. (King Henry V, III.vi.19)**）。

このように英語史では、PPrn 目的語の生起位置に関して通時的变化が見られるが、人間言語を共時的に見ても通言語的な変異がみられることが知られている。Cardinaletti & Starke (1999) は、PPrn はその分布特性により 3 つの異なるタイプ（強 PPrn・弱 PPrn・接語 PPrn）に大別され、言語間でどのタイプの PPrn が幾つ生起可能かが異なっていると指摘している。英語史における PPrn 目的語の生起位置に関する変異は、このような 3 タイプによる PPrn 類型論に基づく、各時代にどのタイプの PPrn が幾つ可能であったかという問題として捉えられる。本論文は、実証的に PPrn 目的語の生起可能性に関して英語史における事実を明らかにし、その形式的認可条件（以下 FLC）の歴史的变化の全体像を捉え、なぜそのような歴史的变化が見られるのかについて原理的説明を与えることを目指した。以下は、本論文を構成する 6 つの章における、検証・考察の概要である。

第 1 章ではまず、Lightfoot (1999) が提案するキューに基盤を置く言語獲得と言語変化のモデルと P&P アプローチの最近の展開であるミニマリストプログラム（MP）に立脚する不活発理論の概要を提示し、本論文で提示する分析の理論的基盤を明らかにした。P&P アプローチでは、人間言語の普遍的な特徴は普遍的な原理で、言語間の多様性は媒介変数の値の定め方の違いによるとされ、さらに MP では、媒介変数の所在は語彙項目を構成する形式素性としている。子供が言語を獲得する過程において各言語の文法の媒介変数の値が定められるが、共時的な言語間変異はその帰結として捉えられる。また、1 つの言語における通時的变化は、各時代の子供が媒介変数の値を親の世代と異なる値に設定した帰結として捉えられる。キューに基盤を置く言語獲得と言語変化のモデルでは、言語変化は、子供が当該の言語事象を獲得する際に用いるキューが他の史的变化の影響で消失すると、親の世代とは異なる値に媒介変数値を設定するようになることの結果として説明されうる。Keenan (1994) が提唱し、その後 Longobardi (2001) が展開している不

うキューの一部の消失)による体系的な V3 の出現に起因するが、北部方言では、SPA の消失は、非接語 PPrn の 3 人称複数形 (主格の *pei/pai*、対格・与格の *pem*、属格の *peir/pair*) の古ノルド語からの借入による体系的な V2 の出現に起因する。さらに、これら一連の変化によって接語 PPrn が消失し、弱 PPrn および強 PPrn を含んだ新しい PPrn のパラダイムを伴った文法体系が結果として 14 世紀中盤に生じたことも明らかにした。これらの知見を踏まえ、初期の時代の英語には、強 PPrn に加えて 2 種類の PPrn が異なる時代に存在しており、OE から EME にかけて存在していた PPrn は宿主 (機能範疇の C/T/v*/K) への接語化を必要とする接語 PPrn であったが、EME から LME の過渡期に消失し、LME では、接語 PPrn に代わって、宿主への接語化を必要としない弱 PPrn が出現したと論じた。

第 4 章では、まず電子コーパスを用いて (1b) の言語現象を調査し、英語史においては PPrn のみを対象とする目的語転位が 14 世紀中盤 (LME) に出現し、19 世紀終盤 (LModE) に消失したことを明らかにした。この知見に対して、OE/EME における定冠詞の出現と EME における T への V 移動の出現と相俟って、上述の LME における新しい PPrn のパラダイムを伴う文法体系が、PPrn のみの目的語転位を可能にしたという説明を与えた。LME における PPrn の目的語転位は、3 つの普遍文法の原理と媒介変数の値の設定にかかわる 3 つの要因 (弱 PPrn の存在・定冠詞の存在・T への V 移動の存在) が相互に作用し合う新たな文法体系によって可能になったことを実証的に示し、この 3 つの記述的な要因を語彙項目の形式素性の観点から再検討し、3 つの媒介変数として定式化した。また、LModE における PPrn 目的語転位の消失は、3 つの要因の内の 1 つである V の T への移動の消失によると論証した。

第 5 章では、第 2 章から第 4 章までの論考で明らかにした英語史における PPrn の FLC の変化に関する分析案に関わる理論的問題を 2 つ考察した。1 つは Westergaard (2009a) が提唱する言語獲得と言語変化のマイクロキューモデルに関してで、本論文でもマイクロキューモデルを踏まえるべきだという結論に達した。もう 1 つの問題は媒介変数の初期値/無標値の設定に関してで、Roberts (2007) が提案する有標性反転という考え方を踏まえれば、本論文が提示した媒介変数値に対する特徴付けは妥当であるという結論に至った。

第 6 章では、実証的調査および理論的考察から得られた知見を概括した。PPrn の FLC は以下のように変化したと結論付けた。OE から EME にかけては、接語 PPrn はその宿主 (機能範疇の C/T/v*/K) に接語化されることによって形式的に認可された。LME から LModE にかけては、弱 PPrn は普遍文法の 3 つの原理と 3 つの媒介変数の相互作用により、V が v*P 外へ移動している場合は転位した位置 (v*の指定部) で形式的に認可された。PDE では、弱 PPrn は、EModE における T への V 移動の衰退により、外的併合された位置 (基本語順) で形式的に認可される。

Biberauer & Roberts (2008a) の研究では、統語部門内で駆動される言語変化は様々な言語事象について実証されているが、本論文では、これまで指摘されていない (1a) と (1b) の言語事象に着目し、PPrn の FLC の変化も統語部門内で駆動される言語変化であることを論証した。